

## 「権力争い」から「異端排除」へ シフトする失脚の構図

国際社会との協調をうたい、またそれが期待されている中国であるが、薄熙来重慶市党委員会書記の失脚事件は、共産党が支配するこの国の異質性を改めて明らかにした。いわゆる失脚事件は共産中国において枚挙に暇がないが、党指導部を構成する政治局委員（およびそれ以上のポスト）を対象とした事件だけに限定しても十指に余りある。

中国ではなぜこれほど多くの失脚事件が起こるのだろうか。それは、失脚という政治現象が一党独裁国家においては不可避であり、いわば宿命にも似たものになっているからである。自らを人民の先天的代表であると規定する中国共産党は民主主義を明確に否定し、政治を党内で自己完結しようとする。しかし、問題は、規律を重んじる共産党といえども党内の統一は保証されておらず、しばしば発

生する党内矛盾が深刻となる場合がある。そのため、異端は排除すべしとの判断があるタイミングで下されると、特定幹部がある日突然、政治の舞台から姿を消すという現象が起こるのである。

### 闘争が党の歴史

#### 総書記も例外でなく

中国共産党内の政争は、力が拮抗する複数勢力間の「権力争い」のケースと、争いというよりもむしろ「指導部（あるいは最高指導者）の方針との不一致と見なされる」ケースとに分かれる。もちろん、2つの要素は複合的に表れるものだが、林彪、鄧小平、四人組などは前者に、劉少奇、胡耀邦、趙紫陽、陳希同等は後者に分類できるだろう。これらの過去を踏まえてみると、「薄熙来失脚」の持つ新たな側面が見えてくる。

代表的な失脚事件を振り返る。

#### 劉少奇（1898～1969）。

文化大革命（文革）最大の標的は、党内序列第2位の劉少奇だった。組織と規律を重んじる劉の政治姿勢が、矛盾の存在を絶対視する毛沢東の目には異端に映ったのである。文革開始直後に事実上失脚した劉少奇は68年、「資本主義の道を歩む党内最大の実権派」として党籍を剥奪され、孤独な死を迎える（80年2月に名誉回復）。

#### 鄧小平（1904～97）。

開放の総設計師」と称賛される鄧小平であるが、彼は生涯で3回、失脚と復活を繰り返している。そのうち、最後の失脚劇は、党副主席兼副総理の要職にある76年4月に起こった。病身の周恩来を補佐しつつ、毛夫人の江青ら「四人組」との間で壮絶な権力闘争を展開していた鄧は、周の死を悼んで大衆が行った追悼活動の「黒幕」として失脚していく（第1次天安門事件）。

**胡耀邦（1915～89）。**最高ポストの総書記でありながら、87年

1月、「集団指導の原則に反し、重大な政治原則上の誤りを犯した」として解任される。この決定を下したイレギュラーな会議の主宰者が鄧小平だった。改革開放政策開始直後の開明派指導者は「ブルジョア自由化」の推進者として葬り去られたのである。なお、胡の前任者である華国鋒も81年6月、事実上失脚している。ただ、華の場合、胡とは逆に「指導思想上の左の誤り」が解任理由だった。

#### 趙紫陽（1919～2005）。

憤死した前総書記（胡耀邦）に対する正当な評価や汚職官僚取り締まりなどを求める学生・市民らの運動を武力で鎮圧したのが、89年の第2次天安門事件（6・4天安門事件）である。この運動の収束方法をめぐって最高指導部内で激烈な論争が交わされたが、総書記の趙は鄧小平を中心とする長老らの強硬路線を跳ね返すだけの党内勢力を形成できなかった。「動乱を支持し、党を分裂させた誤り」を理由に失脚に追い込まれた趙は、没するまで自宅軟禁に処せられた。

陳希同（1930）。建国以降

一貫して首都北京で黨員活動を続け、ついにはその最高ポストである党委員会書記にまで上りつめた人物だ。こうした陳の存在が、第2次天安門事件を契機に活動の舞台を上海から北京に移した江沢民総書記（当時）には極めて不都合だったのだろう。北京市副市長の「自殺」事件の後、陳は95年9月、監督責任や腐敗墮落などを理由に政治局から追放されたばかりか、汚職を理由に16年の実刑判決を受けるのである。類似の事件は、胡錦濤時代に入ってから上海で発生している（06年9月の陳良宇上海市党委員会書記失脚）。

### 「統一性の欠如」が 今後の排除の論理に

特に江沢民指導部以降に特徴的なのは、政治闘争の構図が「権力争い」から「異端排除」にシフトしていることだ。それは、一党独裁を貫徹し続けようとする共産党であるが、その形態が今や毛沢東、

鄧小平時代に特徴的なカリスマ型ではないところに原因がある。つまり、権力確保や奪取を狙う党内敵対勢力を絶対的指導者が排除するというスタイルから、独自色を押し出そうとする特定の異端分子を中央指導部が排除するというスタイルに変わったのである。この構図から見れば、薄熙来失脚も異端排除のケースに当てはまるといえる。

共産党の発表によると、薄氏失脚の理由は「深刻な規律違反」という曖昧なものだ。しかし、重慶市で展開された「紅歌」（毛沢東時代を賛美する革命歌）を歌う運動は、文革の否定の上に成り立つ現在の中国政治にはあまりにそぐわないものだった。また、「打黒」（マフィア撲滅）運動は、確かに大衆から一定の支持を得ていたが、中央指導部が推進する法律重視の方針からは大きくかけ離れ、多くの冤罪を生んだ。こうしたポピュリスト的な派手なパフォーマンスに加え、積極的な公共投資で地域経済の成長率を底上げする手法も、

輸出と公共投資頼みの経済構造から内需拡大への転換を訴える指導部の方針からすれば、錯誤的に映っていた可能性が高い。

薄氏に対してそうだったように、今後は「党中央との統一性欠如」（安定団結の破壊）が一般的な排除の論理となるだろう。そして、その際の具体的「罪状」は、今の中国の世情からしておそらくいかなる高位者も逃れることができない「汚職、職権乱用、個人生活の乱れ」などであろう。こうした「罪状」に対しては、大衆からの不満や批判が強いため、それによって一種のガス抜き効果を期待できるためだ。

また、排除されるのは薄氏のよいうな左派だけでなく、右派や改革派も含まれるということであり、それは特定の人物にとどまらず、世論一般も例外たりえない。薄事件を受け、いわゆる左派のウェブサイトのみならず、改革派的な論陣を張っていたサイトも閉鎖されたのが一例である。

最後に、薄熙来事件の処理方法

には「安定団結」を破壊する禍根が残されているのかもしれない点を指摘しておきたい。

それは、今回の処分が党規約で言うところの「特殊な状況下」で行われたものに属すると考えられるからである。「今回の書記交代は、目下の情勢と大局的観点に基づいて慎重に検討した結果決定された」という党中央による薄氏解任発表が、それを物語っている。薄氏は党規約が定める手続きを踏むことなく、あるいはそのような時間的余裕もなく慌ただしく解任されたのではないかとの疑義が残るのである。安定団結のための措置が逆にそれを破壊し、むしろ矛盾を拡大することにもつながるのではないか。

一党独裁を続ける限り、失脚事件は今後も繰り返し起こるに違いない。中国共産党の「一枚岩的」団結は今、こうした危うい異端排除論理の上に成り立っていることに、我々は引き続き注目していく必要があるだろう。